



TITLE:

第Ⅰ部 誌上報告会編：藤井天文台探訪記 (その2)

AUTHOR(S):

富田, 良雄

CITATION:

富田, 良雄. 第Ⅰ部 誌上報告会編：藤井天文台探訪記 (その2). 第7回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録 2016, 7: 7-8

ISSUE DATE:

2016-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217394>

RIGHT:

藤井天文台探訪記（その２）

富田 良雄

大津市石場にあった実業家藤井善助氏の藤井天文台の建設場所の探索については、「藤井天文台探訪記」に経緯を書いた。その後のこされた課題として、天文台の中に設置されていた望遠鏡や観測機器、その他科学機器類について気になりだったが、杳としてそのゆくえは不明であった。

保管されている可能性が一番高い京都岡崎の有鄰館をおたずねするつもりでつてを求めて知り合いの方々に有鄰館の関係者や藤井善助氏のご子孫の方をご存じだったら紹介していただけないかとお願いすることからはじめた。５月になりすこし手が空いたところに、島津製作所創業記念資料館の川勝さんから、望遠鏡は展示はされていないけれど有鄰館にあり、善助氏のお孫さんにあたる藤井善三郎氏を紹介いたしますとの連絡をいただいた。早速訪問日の打ち合わせをして５月１５日（日）の午後に有鄰館を訪問したのであった。当日は特別展を開催されており、来館者も多く忙しくされていたが、お逢いしてみると祖父善助氏の交友関係からさまざまなことに話題が尽きず、あっというまに１時間あまりがたってしまった。

ゼントネル望遠鏡は屋上の八角堂への出口に置かれていた。『藤井善助伝』に掲載の写真から想像していたよりもしっかりした経緯儀台に載せられ、重量感ある望遠鏡であった。赤道儀架台のほうは３階と屋上との間の踊り場に置かれていた。鏡筒をこちらに載せ換えれば天体儀望遠鏡として使えるものである。



ゼントネル望遠鏡と藤井善三郎氏（右）、学芸員の大島氏



赤道儀架台

鏡筒はほこりで汚れないように紙がまいてあった。有鄰館は大正１５年に完成した建物で、年月の間に壁の傷みがでてきており、今年が９０周年にあたるので補修工事を予定されているそうだ。詳しい調査はその工事が済んでからあらためてお願いすることにして、地下室

に保管されている観測器具類も見せて頂いた。天文台のフランス窓に沿った棚にずらっとならべてあった器具類や標本などが保管されていた。気象観測装置もあった。



ゼントネル望遠鏡の6.5インチ対物レンズ（シュタインハイル製）と観測用機器類

お忙しい日だったのに予定より随分と時間をとっていただき、新しい発見もあった。あとは学芸員の方に出していただいて資料類を見せてもらい、閉館までの残る時間は古代中国の文物の展示を拝見した。こんなに素晴らしいものがあるという驚きの連続であった。それにしても月に2日間しか開館しておられないのはもったいないはなしで、ずいぶんと贅沢な博物館でもある。帰りに今年出版された立派なご著書『祖先文化へのまなざし—永遠の美』をいただけてきた。

藤井天文台の望遠鏡が有鄰館に保管されていることが確認できたことを、昨年連絡をくださった地元大津の平野地区自治会の尾中克行さんにお知らせしたら、いつかご一緒に拝見したいと喜んでおられた。尾中さんたちは『ひらの再発見～昔・今・そして・・・～』という機関誌を発行されて地元の歴史の発掘を紹介されている。そして天文台のあった敷地が最近競売にかけられ更地になったと教えてくださった。大津でもマンションが次々に建設中で、天文台跡にもおそらくマンションが建つのではないかと。かつて近江八景を愛でるためにつくられた月光亭であり天文台であった地の文化的景観がこうして失われてゆくのかと思う。

善助氏は上海にあった東亜同文書院の出身である。米国ハーバードスクールと理念を同じくしたビジネススクールである。彼は辛亥革命により清朝が滅びたときに中国の文物が西洋に流出するのを防ごうと、私財をなげうって貴重なものを買集め有鄰館を建設したのはそうした理念からでもある。また東洋天文学史を創始し、上海自然科学研究所の第二代所長をつとめた新城新蔵との親交もそこから始まっている。

この望遠鏡の所在が確認できたことで、ひとつだけ抜けていたジグソーパズルのパーツがきちっと収まって完成したような気がする。

- ・ Helmut Franz, *Steinheil Munchner Optik mit Tradition*, H. Lindemanns Verlag, 2001,